

知的障害特別支援学級に在籍する小学6年生児童に対して、自己肯定感を高めるため、人との関わりのスキル獲得と得意なことに取り組ませた事例

1. 事例の概要

知的障害特別支援学級に在籍する知的障害とADHDを併せ有するA児（小学6年生）が、自己肯定感を少しずつ高めていった事例である。

A児は語彙の少なさに加え、相手の気持ちをくみ取ることが苦手であり、文章の内容や教員、他の児童との会話の内容を十分に理解できていない。そのため、交流学級の児童ともっと仲良くなりたいと思っはいるものの、自信のなさから関わりをもとうとしなかった。また、A児は双子の姉と比較されることにより、自己肯定感が低かった。

そこで、教室環境を整備したり、A児の成長を保護者に知らせ、家庭でも褒めてもらったりすることで、安心できる場や称賛される場を確保した。その上で、ソーシャルスキルトレーニング（以下、「SST」と言う。）を取り入れたり、特別支援学級の児童と遊ぶ環境を設定したりして、具体的な体験や人との関わりの中で有効なスキルを身に付けられるよう配慮した。また、A児が興味のあることを授業に取り入れ、達成感や自信をもたせる場面を増やした。これらを通して、A児が自信をもって生き生きと過ごす様子が見られるようになってきた。

キーワード コミュニケーション、自己肯定感、SST、ICF

2. 幼児児童生徒等の実態

A児は、B小学校6年生で、知的障害特別支援学級に在籍している。知的障害と併せ、ADHDの診断も受けている。視覚情報を処理することは得意であるが、語彙が少なく、ことばの理解が困難なため、文章の内容や、教員や他の児童との会話の内容を十分に理解できない。また、相手の気持ちをくみ取ることや未体験のことをイメージすることも難しい。A児は「交流学級の友達ともっと仲良くなりたい」と思っているが、自分から声をかけることはほとんどない。双子の姉が同じ知的障害特別支援学級に在籍しており、周りから比較されることにより、自己肯定感の低さがみられる。

A児は、パターン化された学習が得意であり、特に漢字の学習に意欲を示すが、学習に集中できる時間が短いため、ミスが多く、イライラする様子が見られる。

特別支援学級では主に国語と算数を学習している。算数は、小学4年生程度の学力はあるが、苦手意識があり、計算問題では特に集中力が持続しにくく、間違いも多い。

3. 本事例に関する基礎的環境整備

- 小児科医、臨床心理士、作業療法士等から指導・助言を得ている。【基礎2】
- ICF（国際生活機能分類）を基に作成した個別の教育支援計画を踏まえて、担任が個別の指導計画を作成している。【基礎3】
- ワーキングメモリーとコミュニケーションの基礎を育てるため、聞き取りトレ

ーニングやSSTの教材を使用している。【基礎4】

- 教室の前後で授業が行えるように衝立（ついたて）で仕切って、余分な刺激を遮断できるようにしている。【基礎5】

4. 合意形成のプロセス

保護者は、A児に他の児童と仲良く交流してほしいという願いをもっていた。また、家庭では声をかけてもA児が家庭学習をしないことや片付けができないこと、早寝早起きの生活習慣が身に付いていないことについて悩んでおり、担任に対して相談があった。担任はA児の様子から、基本的な生活習慣が身に付いていないことにより叱られる場面が増えていることも、自己肯定感の低下原因の一つではないかと考え、支援により生活習慣の改善をする必要性を感じた。そこで、B小学校内の専門部会で話し合いをし、A児の実態把握等について情報交換を行った。また、保護者や外部専門家も含めてA児の支援会議を行い、個別の教育支援計画の作成や合理的配慮について検討し、共通理解のもと指導を進めていった。

5. 合理的配慮の実際

- 国語の時間にSSTの学習を取り入れ、コミュニケーションスキルの基礎の習得を目指した。【合理①-1-2】
- 他者との会話の内容を十分に理解できていないことから、語彙習得も含めて、国語の学習で聞きとりトレーニングを取り入れた。【合理①-1-2】
- A児と姉の座席を離したり、別々に学習をする場を設定したりして、集中できる環境を整えた。【合理①-2-1】
- 目標を達成する度にピンポン球を貯金することにより、(写真1)、自分の頑張りが量として増えていくことが一目でわかり、意欲や達成感につながるようにした。【合理①-2-1】
- 買い物学習、調理（クラブ活動）など具体的な活動場面を設定し、経験を重ねる機会を増やした。【合理①-2-2】
- 地区別懇談会において、インクルーシブ教育システムの考え方等について保護者や地域住民に説明を行い、理解啓発を図った。【合理②-2】



写真1 ピンポン球を使用した自己評価

6. 本事例の成果と課題

取組の成果としては、国語の学習等でA児のコミュニケーション力を高めたことで、授業に集中する時間が長くなり、学習課題を最後までやり終える回数が増え、A児の自信につながった。また、A児から他の児童に声をかけ、遊ぶことができるようになり、交流学級の児童に対して挨拶をしたり、会話を楽しんだりする様子もみられるようになった。

また、合理的配慮の成果や課題等を中学校へどのように引き継いでいくかが今後の課題であり、中学校との連携や情報交換が重要であると考えられる。